

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格②
聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝も皆さんとIテモテ3章を引き続き見たいと思います。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。私たちは今、教会における霊的リーダーについて、聖書がどんな人物を教会のリーダーとして求めておられるのか、またそのようなリーダーが、私たちひとりひとりにとってどれほど大切なものなのかを改めて学んでいます。きょうもそのことを、3章、特に2節から引き続き学んでいこうと思います。詳しく内容を見る前に、いつものようにまずみことばをお読みします。

Iテモテ3：1-7

「1「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということは真実です。：2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、：3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、：4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。：5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——：6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。：7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

きょうの内容を見ていく前に、前回までの流れを少し思い返してみてください。人が監督として仕えたいと望むこと、それがいかにすばらしい働きを求めることであるかを1節で記したパウロは、続く2節から、その人物が身に付けていなければならない資格について語り始めていました。パウロは、教会のリーダーとして神様と人々に仕えたいとの願いを与えられている人がいるのであれば、それはすばらしいことだ、しかし、ただ願いをもっているだけでよいのではない、その人物が今、みことばが定めた基準にふさわしい歩みをしているかどうか問われるので、そのことをよく吟味をなささいと言っていました。パウロは、人々を導いていくリーダーが教会にどれだけ大きな影響もたらすのかを、よくわかっていました。だからこそ、願いをもってさえいればだれでもその働きにつける、とは言わなかったのです。その代わりにパウロは、教会を監督するリーダーが満たしていなければならない基準として、15個の資格をこの箇所ですべて具体的に挙げてくれていました。そして先週、私たちはその最初の資格「非難されるところのない」というものを考えたのです。

○監督とその資格①：非難されるところがない者 2a節

「非難されるところがない者」でありなさいとは、どういう意味か覚えていますか？「非難されるところのない」ということばは、まず「だれかに掴まれることがない」といった意味をもっていました。つまり「非難されるところのない」人物というのは、その人の歩みのうちに、周りから責められるようなところがないということでした。だれかがその人のうちを見たときに、そこには取り上げて「非難される」ような明らかな罪を見出すことができないのです。この人物はすべての面において潔白な歩みをしている人物でした。でもこれはもちろん、霊的リーダーがいついっさい罪を犯さない完璧な人物だということをおぼわんとしているのではありませんでした。もしそうだとしたら、だれもリーダーにはなれません。罪を全く犯さない人物はだれひとりとしていないからです。リーダーも例外ではありません。でも「非難されるところのない者」というのは、罪を犯したとしてもすぐに罪を悔い改めて、自分の弱い部分について、成長しようといつも熱心に取り組んでいるからこそ、周りの者から指をさされて、とがめられ続け

ることがないのです。例えば、この人はいつも怒りや不満をもっているというふうには指摘されることがありません。この人はいつもプライドにあふれて周りの人を傷つけていると指をさされることもありません。この人はいつも言っていることと行っていることが異なっている、この人は偽善者だなどと言って指をさされることもないのです。教会を監督する者は群の模範であるからこそ、まず第一に、このような基準を満たしていることをみことばは求めていました。

ここで、先週も言いましたが改めて覚えていてほしいことは、教会のリーダーにとって何よりも大切なことは、どんな能力や権力というものをもっているかよりも、その人がどんな歩みをしているかだということです。どんな歩みをしているかがいつも問われるのです。模範であるべきリーダーがみことばから外れてしまえば、それに続く者たちも正しい道から外れてしまいます。そしてリーダーが道から外れてしまえば、教会全体に大きな悲しみや苦しみというものをもたらしてしまうのです。だからこそ、どんな才能や学歴をもっていることよりも、どんな社会的な地位をもっていることよりも、ことばに巧みな者であることよりも、戦略を練って組織を上手に運営するといった能力をもっていることよりも、霊的リーダーにとって重要なのは、その人がどれほどキリストに似た者であるかだということです。パウロはそのことが大切なのだと教えていました。ですから、こうしてみことばを見ると、教会の長老、教会の監督、牧師には、大きな責任の高い基準が求められていたのです。

でも、私たちはそこで終わりませんでした。「非難されるところのない者」というのは、何も霊的リーダーだけに求められていたものではありません。皆さんひとりひとりにとっても追い求めていくべき目標だったのです。聖書ははっきりと、すべてのクリスチャンがそのような「非難されるところのない者」として生きていくことを教えていました。私たちはみなキリストのすばらしさをあかしする者としてこの地上を生かされています。だからこそ、周りの人たちが私たちの歩みのうちに、キリストのすばらしさを見出すことができるのが、今ひとりひとりに問われているのです。

思い返せば、パウロはこんなことをよく口にしていました。「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」(Iコリント11:1)と。パウロはここで自分自身のことを誇っていたわけではありませんでした。でも、彼はいつも自分の愛する主に似た者になることを目指して歩み、すべての面で人々の模範となるような歩みをしていたのです。だからこそ、そのように言えました。問題は今、私たちひとりひとりがパウロのように「私を見ならってください」というような歩みをしているか、それとも、だれかにいつも指摘されるような歩みをしていないかが問われていたのです。

先週みことばを見て、皆さんそれぞれの今の歩みは「非難されるところのない者」としての歩みだったでしょうか？アメリカのプリンストン神学校の教授でもあったアーチボルド・アレクサンダーという人物はこんなことばを残しています。「模範は教えよりも雄弁に語り、生きた実践的な信仰は議論や巧みな言葉よりも人に大きな影響を与える。」私たちがよく考えなければいけないことばですよ。私たちがどのような歩みをしているのが問われているのです。でもこれは私たちが罪を犯さないという話ではありません。私たちはみな罪を犯すのです。でも、その度に心から悔い改め、「非難されるところのない者」として成長していくこと、それが神様から私たちに求められていたことでした。そしてこれこそが、監督の一つ目の資格としてパウロが挙げていたものでした。

○監督とその資格②：ひとりの妻の夫である 2b 節

さて、きょうは続けて二つ目以降の資格を皆さんとともに学んでいきたいと思います。2節はこのように続いていました。「ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、…」、監督の15個の資格として二つ目にパウロが記していたもの、それは「ひとりの妻の夫である」ことでした。要するに、教会を監督する者というのは「ひとりの妻の夫である」ことにおいても「非難されるところのない者」でなくてはならないということです。

1. 重要さ

パウロは、この「ひとりの妻の夫である」という資格が、教会のリーダーにとって非常に大切なものであるとよく理解していました。だからこそ、彼はテトスへの手紙の中でも、教会の長老の資格というものを同じように記してくれているのですが、そこでもこのように出てきました。テトス1：5-6にこのように記されています。「5 私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。6 それには、その人が、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、その子どもは不品行を責められたり、反抗的であつたりしない信者であることが条件です。」「ひとりの妻の夫である」と書かれていましたね。パウロはここでも長老の条件として、「非難されるところがない」というものを最初に記して、それに続けて「ひとりの妻の夫である」ことを求めています。考えてみてください。別にパウロはほかのものを挙げることもできたのです。現に、それ以降に書いている資格は、テモテのものとは違ったものをテトスへの手紙で連ねているのです。しかしパウロは、「非難されるところのない」ということと、「ひとりの妻の夫である」ということだけは、どちらの手紙にも同じように記していました。それだけ、リーダーにとって絶対に欠かせないものだという事です。

またパウロは監督だけでなく、執事に対しても同じように「ひとりの妻の夫である」ことを求めています。Iテモテ3：12を見ていただくと、「執事は、ひとりの妻の夫であつて、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。」とあります。ですから私たちがこうやってみことばを見ると、パウロは繰り返し、教会のリーダーとしての働きをする者はだれでも、それが監督であろうが執事であろうが、「ひとりの妻の夫である」ことが絶対に欠かすことはできないと訴えていたのです。

2. 定義

では皆さん、それだけ重要なものであるとすれば、「ひとりの妻の夫である」ということを、私たちが正しく理解していることが大切になります。このことばは一体何を意味しているのでしょうか？

実を言うと、この「ひとりの妻の夫である」ということばが実際に何を意味するのかについては、昔からさまざまな人々によって議論されてきました。このことばをギリシャ語そのままに直訳すれば、「ひとりの女性の男性」というふうに言い表すことができます。でもこれだけでは意味がよくわかりません。だからこそ多くの人たちが、ここでパウロは一体何を言わんとしているのだろうかと考えてきたのです。きょうはそのすべてを一つ一つ詳しくは見られませんが、これまでに考えられてきた四つの考え方を皆さんと一緒に見てみたいと思います。どの考え方が「ひとりの妻の夫である」のことばに適しているのでしょうか？

●ひとりの妻の夫であること：考えられてきた四つの可能性

1) 監督は結婚した男性でなければならない

まず一つ目は、パウロはここで、「監督は結婚した男性でなければならない」言い換えれば、独身の男性は教会のリーダーにはなれない、必ずひとりの女性、妻を持った者でなくてはならないと、教えているという考え方です。もしこの考え方が適しているなら、私は今からこの立場を降りないといけなくなります。でも果たしてそれが言われていることなのでしょうか？これは少しおかしいのです。なぜなら、まずパウロが使徒として仕えていた頃、彼自身は独身でした。彼はこのように言っています。Iコリント7：8で「次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていただけるなら、それがよいのです。」と。またそのパウロが主のために働くことにおいて、独身の者がもっている強みや利点というものに関してIコリント7：32-34で「32 あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。33 しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、34 心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」と語っていました。ここでパウロは、結婚というものが悪いという話をしていたのではありませ

ん。夫が妻のことに心を配るということも、妻が夫に心を配るということも当然そうあるべきですし、それはすばらしいことになるのです。ではパウロが何を言わんとしたのか？パウロは独身であれば、ほかの何かに心を囚われるのではなくて、ただ主に喜ばれることだけに心を配ることができる。それが独身の者がもっている利点なのだと訴えていたのです。ですからパウロ自身も独身でしたし、独身の男性、独身の女性がもっているその利点というものをパウロは訴えていました。このことを踏まえたときに、パウロが、監督は結婚した男性でなければいけないと教えている、という考え方が適しているとは思えないのです。結婚している者であろうとも、独身の者であろうとも教会のリーダーになることはできます。

2) 監督は一人以上の妻を同時に持つてはならない

二つ目の考え方として挙げられることは、「監督はひとり以上の妻を同時に持つてはならない」ということです。言い換えると、教会のリーダーとなる者は複数の妻をもっているはいけないと、パウロはここで一夫多妻制を禁じているとの考え方です。これはその通りですよ。聖書を読めば、複数の妻をもっているということが間違っているということは、はっきりと見て取ることができます。でも、果たしてそれをこの箇所ではパウロが言いたかったのかが問題なのです。パウロは、監督が複数の女性を妻としても持つてはいけない、というようなことを言わんとしたのでしょうか？それも少し違います。そもそもこの当時のクリスチャンの間では、一夫多妻制ということ自体が大きな問題ではありませんでした。だからこそ、あまり問題になっていなかったものを、パウロがあえてここで強調しているとは考えにくいのです。

3) 監督は生涯一人の妻だけを愛する者でなくてはならない

三つ目の考え方として挙げられることは、「監督は生涯ひとりの妻だけを愛する者でなくてはならない」ということです。言い換えれば、再婚をした人は教会のリーダーにはなれないと。たとえ自分の妻が亡くなった後でも、聖書に基づいた離婚が行われたとしても、それがどんな理由であれ、そのような者は教会の監督にはなれないと教えていると考えます。果たしてこの考え方は正しいのでしょうか？聖書的なのでしょうか？これもおかしいです。私たちが新約聖書を見た時に、そのようには教えられていないからです。パウロは、自分の配偶者が亡くなった後、ほかの人と再婚することが罪ではないとはっきりと記していました。ローマ7：2-3に「:2 夫のある女は、夫が活着ている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。:3 ですから、夫が活着ている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。」と書かれています。

もちろん自分の配偶者が活着ている間に他の人のところに行けば、それは大きな罪です。しかし亡くなった後で再婚するということに関しては、みことばはよしとしていました。主がそのことを認めておられるのだとすれば、再婚した者が監督にはなれないという考え方はおかしいですよ。また離婚に関しても同じです。神様は確かに離婚というものを明白に嫌っておられます。マラキ2：16でも「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、【主】は仰せられる。…」と記されています。神様は離婚というものを憎まれるのです。しかし同時に、相手が不貞を働いた場合や、相手が未信者で、自分を捨てて離れていくような場合に限っては、みことばはそのことをよしとしていました。ですからそのように私たちがみことばを見たときに、主は聖書に基づいた離婚、またそのような離婚した者たちが別の人と再婚することを許しておられたのです。だとすれば、再婚した者が監督にはなれないという考え方は、やはり少しおかしいですよ。

こうして私たちが三つの考えを見ましたが、どれもここに適しているとは言えません。

4) 監督は夫婦関係や性的きよさに関して聖さを保つ者でなくてはならない

最後四つ目の考え方として挙げられるのは、「監督は夫婦関係や性的なことに関して聖さを保つものでなくてはならない」ということです。言い換えれば、教会のリーダーとなる者は、自分の妻をいつも心から愛し、誠実に仕える者でなくてはならない、とパウロは教えているというものです。この考え方こそが、この「ひとりの妻の夫である」ということばの意味に最もふさわしいものということができます。パウロが言わんとしたのは、監督は夫婦関係や性的なことに関して、聖さを保つ者でなくてはならない。もっと言えば、教会のリーダーとなる者は、自分の妻をいつも愛し、誠実に仕える者であること、自分の配偶者にいつも忠実であることが求められているのです。いつも忠実でありなさいと。

でも皆さん、ここで少し考えてみてください。いつも自分の妻や、結婚生活において忠実であることとは具体的にどのようなことを意味しているのでしょうか？私たちはよくそんなことばを聞きますけれども、それは果たしてどういう意味を持っているのでしょうか？「ひとりの妻の夫である」というのは、ただ不貞を働いて自分の配偶者以外の人と性的な関係を持たないということを表しているのでしょうか？ただ他の女性とそのような関係さえ持たなければ、この条件を満たしていることになるのでしょうか？もちろんそうではありません。確かにそういった性的な罪というものを犯さないことは、非常に大切なことです。でもパウロはそのような外側の部分の話だけを言わんとしたのではありませんでした。

皆さん、大切なことなのでよく覚えていて下さい。ここで問われていることは、外側だけではなく内側の話だということです。自分の妻をからだだけでなく、心から愛しているかが問われています。「ひとりの妻の夫である」というのは、自分の願いや考え、心の隅々に至るまで、自分自身のすべてをその妻のためにささげるような人物のことを言うのです。だからもしかしたら、ひとりの女性と長い間結婚生活をしていたとしても、「ひとりの妻の夫」ではない人物がいるということです。ひとりの妻の夫であるというのは、自分の心すべてを妻のためにささげる人物でした。パウロはその姿をわかりやすく別の箇所でご教えてくれています。エペソ5：25-30にこのような命令が書かれていました。「25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。30 私たちはキリストのからだの部分だからです。」と。

パウロはどんなふうに夫が妻を愛するべきだと言っていました？自分勝手な方法や、自分の定めた基準に基づいて愛しなさい、とは書かれていませんでした。そうではなく、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、夫は妻を愛し、養いなさいと教えられていたのです。つまり、犠牲を払って与えるという愛が求められているということです。

思い返してみてください。イエス様の示された愛ほど犠牲的な愛はありませんでした。ローマ5：7-8で「7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と書いています。私たちが神様の愛に値するような存在だったから、神様は私たちを愛してくださったのではありません。私たちがまだ罪人であったときに、言い換えれば、私たちが神様の敵として歩み、だれひとりとしてその救いにも赦しにも値しないようなそんなときに、私たちが「あなたのことなんて知りません、あなたになんて従いたくもありません、私の生活にあなたは必要ありません」と言って、神様に逆らっていたときに、キリストは自ら進んで十字架にかかり死んでくださったということです。これが、主が私たちに示してくださった愛でした。主はそのような大きな愛をもって、そのような大きな犠牲を払って、本来であればそれに値

しないような者のためにご自分の命をささげてくださいました。そしてこの方を受け入れる者に、私たちに何よりも必要であったその救いというものを与えてくださったのです。これが、キリストが私たちに示してくださった愛でした。

3. 適応

1) 監督

パウロは、この主が払われた同じ犠牲をもって、自分の妻を愛するようにと教えていたのです。そのような愛を実際に今、示しているのでしょうか？確かにそこに難しさがあるということは皆さんがよくわかっておられます。相手の罪や弱さというものに向き合わなければいけませんし、考えが合わずにすれ違いや争いが起こるといことも皆さんはよく経験されているのです。でもキリストが愛されたように、たとえ相手がどうであれ、犠牲を払って愛するか？ということが求められています。

マッカーサー先生はこのように言っています。「夫は妻の人柄に応じて愛するようにと命じられているわけではありません。夫が妻を愛するのはそれが神の御心であると命じられているからです。」と。相手がどうだから、愛します、ではありません。相手がどうであれ、キリストが私たちに愛してくださったように愛を示すかどうかです。ですから「ひとりの妻の夫である」その人物は、どんな時も変わらない愛で、自分の妻にすべてをささげようとします。心からの愛をもって、ますます相手がキリストに似た者へと変わることができるように教え、導き、養い、守っていくのです。そしてそのために犠牲を払うことであれば、それもよしと。その犠牲を払って仕えることがその人物にとっての何よりの喜びになるのです。パウロはまず、監督という者はそのような人物でなくてはならないと教えていました。

2) 結婚している男性

しかしパウロは別に監督だけにそのことを教えていたわけではなかったのです。「夫たちよ。」と書いていました。ということは、結婚されている男性の皆さんは、このような愛を実践しているのでしょうか？このような願いをもって今を歩んでおられるのでしょうか？自分の妻が何よりも大切な者であるからこそ、からだだけではなく、その考えや思い、その隅々に至るまで性的な聖さを保とうとされているのでしょうか？ちょっと立ち止まって考えてみてください。皆さんが妻に対して示しているその愛でもって、もしキリストがあなたのことを愛されたとすれば、愛を示されるのだとすれば、それは皆さんにとってどうでしょう？皆さんは「ひとりの妻の夫である」ことにおいて「非難されることのない者」として歩んでいるのでしょうか？もちろん、このことを完璧にできる人はいません。パウロは完璧さを求めているわけではないのです。求められていることは、私たちひとりひとりがこの目標を目指して進み続けているか、ということです。パウロはそのために、私たちひとりひとりが目指していくべき目標をここに記してくれていました。罪を犯すことも失敗することもあります。でも、それを悔い改めて歩むことです。隠すのではなく、正直に告白することです。鍵は、いつもキリストの姿を覚えて歩いていくことです。

3) 結婚している女性

また結婚されている女性の皆さんにとっても、これは非常に大切なことです。もしかしたら今までのことを聞きながらこんなふうにも思われたかもしれません。私の夫は全然この基準を満たしてない、きょう帰ったら話すことがたくさんあるわと。もしそう考えているのだとすれば、少し立ち止まって、まず自分のこととして考えてみてください。みことばは皆さんにもチャレンジを与えていました。パウロは夫にだけでなく妻に対しても命令を与えています。エペソ5：22、24で「:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。…:24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。」と。はっきりと書かれていました。皆さんは主に従うように、ご自身の夫に喜んで仕えようとしているのでしょうか？パウロはいくつかの場面においてとか、少しだけとは言わずに、すべてのことにおいて愛と尊敬を持って仕えることを求めています。そのような者として歩んでいる

でしょうか？それとも自分の思い通りにならなければ怒ったり、不満を抱いたりして夫のことばに耳を傾けようとはしないのでしょうか？みことばが私たちに教えてくれていることは、夫も妻も同じです。妻に問われていることも夫と同じです。だとすれば同じように考えてみてください。皆さんが自分の夫に対して示しているその愛でもって、キリストがあなたのことを愛されたとすれば、愛を示されたとしたら、それは皆さんにとってどうでしょう？夫が自分の理想とは異なるから愛さないのではありません。妻が夫を愛するというのは、それが神のみこころであると命じられているからです。だとすればすべての人が同じです。同じようにキリストの姿をいつも覚えることです。キリストがどのような愛を示されたのかということ覚えて、そしてそのことを実践することです。罪を犯したときには、これは仕方ないからと言い訳して隠すのではなく、悔い改めて、赦しを求めながら成長していくことです。

4) 独身者

そして最後に、これは結婚している人だけに当てはまるものでもありません。独身の人にもみことばは同じように、性的な聖さというものを保っていくことを求めています。Iテサロニケの4：3でも「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、」と記されています。みことばは、すべての人が「不品行を避け」て、聖くなっていくこと、それが神様のみこころであると教えていました。つまり聖さを求める歩みというものは、結婚している者だけのものではないということです。結婚してから、そのような聖さを追い求める歩みを始めるのではなく、結婚する前から、聖さを追い求める歩みをする必要があります。だとすれば、それぞれ自分自身の心に問いかけ続けることです。自分自身のうちに明るみに出されたら困るような性的な罪が隠されていないでしょうか？異性に対して罪を犯さないように、キリストの姿をいつも覚えて、みことばによって心を守ろうとしているでしょうか？また、キリストが示されたその愛を、兄弟姉妹に対してまた周りの人々に対してあかししようとしているでしょうか？

すべての人が追い求めていくべき模範が、目標がここに記されていました。これが二つ目にパウロが挙げた監督の資格「ひとりの妻の夫であること」でした。教会のリーダーは自分の妻をいつも愛し、聖さを保って、忠実に仕える者として歩んでいくことが求められていました。

さて二つ目の資格でかなり時間を使いましたが、残りの時間で監督の三つ目の資格を考えたいと思います

○監督とその資格③：自分を制する 2c 節

三つ目に挙げられているもの、それは「自分を制する」ことでした。もう一度テキストを見ていただくと、2節に「非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、…」というふうに繋がっています。教会を監督する者は、「自分を制する」ことにおいても「非難されるところのない」人物でなくてはならない、とパウロは教えていたのです。

1. 定義

ではそもそも、この「自分を制する」というのは一体どういう意味なのでしょう？ここで出てきている「自分を制する」ということばは、もともと「酒に酔っていない」とか「しらふの」という意味があります。ですからこういった意味から、教会のリーダーというのはお酒によって泥酔しない人であること、アルコールを過剰に摂取しないいつもしらふの人でなければいけない、とここでパウロが教えていると考える人もあります。もちろん、それも間違いではありません。でも、文脈を見てみれば、この後に続く3節の一番初めのところには、「酒飲みでなく、」と書いています。パウロはリーダーとお酒の関係についても後で述べているのです。だとすれば、果たしてパウロはここで、「自分を制する」ということばと「酒飲みでない」ということばを全く同じ意味で用いていたとは考えにくいですね。そこには違いがあるのです。ではほかにどんな意味があるのか？

実を言うと、このことばは当時、もう少し幅広い意味として、「用心深い、節度のある行動」とか、「欲求に対して自分を制する」といった意味で用いられていました。つまりここでパウロが伝えたかったことは、お酒だけの話ではなくて、監督というのは、いろんな欲に対していつも思慮深く、自分を制御することができる者でなくてはならない、ということでした。この「自分を制する」ということばに関して、ジェリー・ブリッジスという先生がわかりやすくこのように証言してくれています。「自制とは自身の願いや欲求、強い衝動、感情や情熱を管理したり、慎重に制御することです。それは私たちが“ノー”と言うべき時に“ノー”ということです。」自分を制することができる者というのは“ノー”と言って断るべき時にはっきりと“ノー”と言える人物だということです。言い換えれば、この人物はいつも自分の欲求に振り回されたり、感情の赴くままに生きている人物ではないということです。“ノー”と言うことができるのだと。パウロは教会の監督となる者は、いつも思慮深く、自分の身を慎む者でなくてはならないと、そう求めていました。

2. 重要さ

皆さんこれもリーダーにとって大切なことになるのです。なぜなら、霊的なリーダーは群を導くという大きな責任をもっています。そしてそのような大きな責任をもっている以上、人々の課題や問題に向き合っていくことが求められるのです。時には、深刻な場面に直面することもあります。もし、自分が深刻な問題をもっていたとして、そのリーダーのところに行って、そのリーダーがいつも感情によって左右され、物事を慎重に考えることができなかつたとすれば、どうなります？みことばから必要な助けをもらうことができませんよね。またリーダーが人々の必要を満たすことよりも、自分の願いや欲求を満たすことに精一杯になっていたとすれば、皆さんはそのような人を信頼できるでしょうか？そのようなリーダーは群の模範にはなれないと、パウロは教えているのです。群の模範である以上、教会を監督する者というのは、「自分を制する」ことにおいても「非難されるところのない」霊的に安定した人物でなくてはならないのだと教えていました。その人物というのは、欲に支配されることはなく、慎み深い者として歩むという大切な責任が与えられているのです。監督というのはそのような大きな責任を負っています。

でも皆さん、これまでと同じようにこの「自分を制する」ということも霊的リーダーにのみ与えられているものではありません。聖書ははっきりとすべてのクリスチャンが例外なくこの基準を追い求めていく必要があると教えていました。パウロも I テサロニケ 5 : 6 - 8 で「:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」と言っています。パウロはここで二度にわたって、「慎み深い」ということばを用いていました。何を言わんとしているかと言えば、人々が注意深く、「自分を制し」て、昼の者として歩んでいきなさい、と求めていたのです。また「自分を制する」=「自制」ということは、新約聖書だけでなく、旧約聖書の中でも、信仰者にとって「自制」は大切なのだと教えられています。例えば、箴言 25 : 28 では「自分の心を制することができない人は、城壁のない、打ちこわされた町のようなのだ。」とそのように書かれています。私たちがみことばを見るときに、私たちの歩みにとって「心を制する」ことが欠かせないものだと、はっきりみことばが訴えていることを見て取ることができるのです。私たちにとって「自制」というものは大切なものなのです。

だとすれば皆さん、よく自分自身の歩みを振り返ってみてください。果たしてそのような者としてきょうを歩んでいるでしょうか？私たちの周りの人たちが私たちの歩みを見たときに、一体そこに何を見るでしょうか？そこに見るのは、感情に支配されることのない安定した歩みでしょうか？それとも自分のうちに起こっている強い衝動を抑えることができない、いつも不安定な歩みでしょうか？周りの者は、皆さんのことを思慮深い、落ち着いた人だと見るでしょうか？それとも、いつも欲求に振り回され

ていて、自分の思い通りにならなければすぐに怒ったり、不満を口にする者として見ているでしょうか？状況が変わらなければすぐに絶望して、悲しみに暮れるような者と、皆さんのことを見ているでしょうか？

考えてみれば、私たちの周りには、私たちが楽しむことができるようなすばらしいものも、神様からたくさん与えられています。私たちはそれを楽しむこともできるのです。でも、それらのものが私たちの益になっていないとわかったなら、すぐそれらに対して、はっきり“ノー”と言えるでしょうか？それともそれらによって心が支配されてしまって、これだけは絶対に手放したくない、これだけは絶対に譲ることができない、と頑なになっていないでしょうか？よく考えてみてください。私たちの心は、今何に囚われているか、が問われています。一体私たちは何に喜びを、満足を見出しているのでしょうか？キリストに、でしょうか？それとも、それ以外のものでしょうか？神様は私たちひとりひとりが「自分を制する」者として成長していくことを望まれていました。

●どうすれば自分を制する者として成長できるのか？

でもここで皆さんに覚えていてほしいこと、それは、クリスチャンにとってこの「自制」というのは、聖霊なる神様が私たちのうちに生み出してくださるものだ、ということです。これは皆さん、大切なことです。言い換えれば、私たちの「自制」というのは、完全なる自分の意志の力によってのものではない、ということです。なぜなら、パウロはガラテヤ5：22-23で「:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、:23 柔和、自制です。」と書いていました。「御霊の実は…自制です。」と。だからこそ、もし私たちが「自分を制する」者として成長することを願うのであれば、私たちにとって何よりも大切なのは、神様により頼むことだということです。私たちのうちに働いてくださって、私たちのうちに「自制」というものを生み出してくださる神様に信頼することが大切だということです。なぜなら、もし皆さんが自分の力で、聖書の求めているこの「慎み深い」者として成長しなければいけないのだとすれば、そこには絶望しかありません。なぜなら、私たちのうちには、そんな力はないからです。どれだけ自分がこのようにしていこうと決めたとしても失敗するということを、皆さんはよくわかっています。私たちに大切なことは、私たちのうちにはそのことができる力はないと認め、そしてそのことができる主に目を向けることです。その方に目を向けて、みことばを心に蓄え、御霊に満たされて歩んで行くなれば、主が私たちのうちに働いて、その実を実らせてくださるのだとパウロは教えていました。だから皆さん、私たちの希望はここにあるのです。私たちが主に心を留めて、みことばで心を満たして歩んでいくなれば、主が私たちを変えてくださるのだと。そのような「自制」のある者として、私たちは生きていくことが求められていました。そしてこれが三つ目にパウロが挙げた監督の資格、「自分を制する」ことでした。教会のリーダーはいつも思慮深く、御霊に満たされ、「自分を制する」ということが求められていたのです。

○まとめ

きょう私たちは、監督の資格の二つ目と三つ目を見ました。パウロはまず霊的リーダーという者は「ひとりの妻の夫である」ということが大切なのだと言いました。どうしてパウロがそう言ったかは想像つきますね。パウロは「非難されるところのない者」のすぐ後に、「ひとりの妻の夫である」ことにおいて、その条件を満たしていないといけなかったと言いました。なぜならそれは、夫婦関係ほど親密な関係はないからです。私たちは他の人の前ではよいように取り繕うことができます。私たちは外にいるときは正しいことができるかもしれませんが、問題は、自分の夫や妻の前でどのような歩みをしているかということです。自分の夫や妻の前にいるその姿こそが、私たちの本当の姿だということです。だからその点において「非難されるところのない者」でありなさいと、パウロは教えていました。

またパウロは霊的なリーダーにとって「自分を制する」こと、そのことも欠かせないのだと教えてくれました。考えてみても、模範となるべき存在であるリーダーが感情や欲に振り回されてしまえば、

教会だけでなく、家庭や職場においても大きな問題が生じるのです。あかしにはならないのです。だからこそ、監督というものは、「自制」のある者でないといけないし、みことばは皆さんひとりひとりも「自制」を求める者でなくてはならないと教えていました。

聖書は例外なく、私たちみながこの目標を目指して歩いていくようにと教えています。非常に高いハードルですよね。でも、だからこそ、私たちはいつも、私たちの主の十字架を覚えることです。主がどのような愛を、どのような犠牲を私たちに払ってくださったのかを覚えることです。色々なものに誘惑されるのではなく、自分自身の心のうちに主のすばらしさを満たして、そのことに心を留めて歩いていくこと、そこに自分の満足を見出すということです。私たちには成長することがたくさんあります。失敗をすることも、罪を犯すこともあります。でも、成長に欠かすことのできないみことばもここにあります。また神様に頼ることもできます。問われているのは、私たちがこの主に忠実に歩み続けているかということです。ですから、この一週間もこの目標を目指してともに歩いていきましょう。